

## 選考委員会総評

委員長 大石 芳野（おおいし よしの）

今回の応募作品総数は例年に比べて少なかったですが、中身は濃いものでした。そして今までと違ったのは、外国人の応募が目をつけたことです。日本で外国の方々が懸命に写真を撮り、写真集や写真展で活躍していることに励まされます。日本も国際的になったと感じながら、今後にも期待したいと思っています。今回の選考にあたり、林忠彦先生が「なるほど！」と頷かれるような作品がたくさん集まるといいなと思っていましたが、期待を超えてそうした作品が集まり私も選考をしながら嬉しくなりました。

その中で林忠彦賞に輝いたのが新田樹さんの「Sakhalin」です。新田さんは以前もサハリンをテーマに作品を発表されており、この写真集はそうした撮影の延長線にあります。それだけ何度も通ったということでしょう。サハリンを訪れたことがない私にとっても、この作品から多くを伝えてもらいました。サハリンは日露戦争によって日本となりましたので日本人も多く住んでいましたが、昭和の戦争によって、住民はさまざまな苦難に遭いました。命を落とした人もいれば、ぎりぎりですその地を離れた人もいました。

今の時代、私たちはこのサハリンがどういう地域になり、どういった人たちが住んでいるかなどについてはあまり知りません。この写真集によって、日本人やロシア人、コリアン、シベリアの少数民族といった多様な人たちが住んでいることが分かります。お互いの存在と尊厳を認め合い、生活を助け合い、それぞれの文化を大事にしながら交流しているといった生活の営みがどの写真からも伝わってきます。民族のルーツは違っても一つの「サハリンの民族」というか、一つの共同体で暮らしていることが伝わってきます。一人一人は誇り高く、とても良い表情です。戦争からの長い歴史を引きずらざるを得ない運命もしみじみと感じられます。それは何よりも写真に力があるからです。偶然に撮れたのではなく考えながら、狙ったところをきちんと撮ろうと姿勢を正していることもよくわかります。料理や周囲の草花、冬枯れの畑（平原）も含めた生活感も撮影されていて、もっと見たいと思わせます。作者のサハリンに対する愛情の深さに加えて、考え方や見方も地に足がついています。人びととのコミュニケーションも確かなものです。今後のさらなる活動が期待されます。